News Letter　2010.10.20　第 32 号

たちばな
京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

認知症あんしんサポーター講座（第２回）
－認知症とその介護について学んでみませんか－

日時　　平成 22 年 9 月 9 日（木）　15：00 ～ 18：30
場所　　女性研究者支援センター
参加者　教職員・学生　９名
プログラム
　１．講義（認知症についての理解）
　２．DVD 視聴（認知症対応型デイケアの取組）
　３．認知症の方への接し方、お役立ち情報
　４．体験談（認知症の人と家族の会）
　５．意見交換

第２回「認知症あんしんサポーター講座：認知症とその介護について学んでみませんか」を、左京南地域包括支援センターのご協力を得て開催しました。本講座は、認知症を理解し、認知症の人と家族を温かく見守り支援する人を養成することを目的としています。京都大学ではこれ以外に、参加者同士の交流という目的を加え、認知症に興味がある人、介護に直面している人など、様々な背景を持つ人達が、立場をこえて安心して自分の状況や疑問について話をできる場、また参加者同士のつながりの場として機能していくことを目指して開催をしています。今年のプログラムは、リピーターがいても参加する意義を持てる場にできるよう、内容は昨年より一部変更しました。

プログラムの内容を簡単に紹介します。最初の出来谷医師からの説明では、「認知症」と「物忘れ」の違いや、認知症の予防や薬物療法に関する最新の知識をご紹介頂きました。次に DVD 視聴では、あるご夫婦の生活を通して、認知症を抱えながら暮らす本人と介護者の日常の様子が紹介されました。認知症の夫と介護者である妻が、病気の宣告を受けてから安定した生活を取り戻すまでの心の葛藤や、実際に直面したトラブルを振り返り、様々な生活上の工夫をしながら「今を楽しんで生きる」ことを大切にして暮らしているご夫婦の姿からは、認知症とともに生きるということの意味が親しみを込めて伝わってきました。

講座の後半では、左京南地域包括支援センター支援員の方から、「認知症の方を在宅で介護するにあたって」という内容で、介護認定の申請方法や近隣関係におけるポイント、遠隔地介護の場合に便利なサービスなどについてご紹介を頂きました。その他、介護に関して困っていることがあれば、当該の地域包括支援センターに尋ねることで解決策が見つかる場合があるという説明を受けて、参加者は熱心に耳を傾けていました。最後に、「認知症と家族の会」の原田眞美さんより、介護の経験とその中から学んだことを中心に語っていただきました。原田さんが介護をなさってきた経験の内容は、短時間では集約できないほどの厚みですが、主介護者としての立場からはもちろん、他の家族の気持ちや認知症を抱えて不安に感じている本人の気持ちを、当時の出来事を振り返りながら鮮明に語って下さいました。

一連のプログラムを終えた後は、参加者を交えた意見交換でした。参加者からは、内容に関する質問や意見が出ました。実際に介護をする中で直面している困難が出されると、こうすればうまくいったというような体験談が出され、困っている内容についてお互いにアドバイスをしながら話題が展開していくという場面もあり、充実した内容で時間が超過しての閉会となりました。

〈講座後のアンケートより一部ご紹介〉
・認知症の人自身の意識、認識の状態、気分、感覚などに基づいた、周囲の人の対応方法などをもう少し詳しく知りたかった。
・身内が最近認知症と診断されました。今日はいいお話しを伺い、特に「本人の心に寄り添う」ということの大切さを再認識しました。
・貴重なお話しを聞ける時間を過ごさせていただきました。認知症の知識を知ると知らないとでは、本人への心のケアが全く違ってくると思います。家族である私たちが望めば、外からの支援が受けられるという手立てがあることで、頑張っていく力にもなりました。
・「認知症」は恐れる病気ではなく、家族や周囲が適切な知識を持ち、対応していくことが重要なので、このような講座を通して「認知症」を広く理解してもらうことは重要と思います。

育児・介護支援事業ワーキンググループ　鈴木 和代

京都市左京南地域包括支援センター
住所：〒 606-8384
川端通夷川上る新生洲町９７
電話：771-6300　　FAX：771-6299
担当学区：吉田，聖護院，川東，新洞，岡崎

【女性のための相談室　開室日】　利用には予約が必要です。
11 月 5 日、11 日、19 日、26 日　　12 月 3 日、10 日、17 日、24 日　　1 月 7 日、14 日、21 日、28 日

ジュニアキャンパス 2010

日時　　平成 22 年 9 月 25 日（土）　14：15 ～ 15：45
場所　　京都大学女性研究者支援センター
参加者　京都市およびその近郊の中学生

今年度も、京都市教育委員会との共催で、「京都大学ジュニアキャンパス」が開催されました。今年度のテーマは、「個性を伸ばそう、独創を活かそう」です。本事業は、中学生に、学問の最先端の現場に触れてもらい、将来学びたいことを考えたりするきっかけを作ろうとするものです。女性研究者支援センターは、伊藤公雄教授（文学研究科）と、センターが前期に実施したポケットゼミ「ジェンダーと科学」の学生 4 名が講師となり、ゼミ「大学生と語るジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」などの社会的差別）」を提供しました。

はじめに、伊藤教授によるイントロダクションが行われました。「ジェンダーって何？」という問いかけから講義は始まり、日本における女性研究者の少なさの背景、政府による支援施策の始まり、女性研究者支援センターの活動について説明がありました。そして、参加した中学生に、「男／女であることで　得したこと／損したこと」などを考えてもらい議論を行いました。

次に、ゼミ生がファシリテーターとなり、ワークショップ「雑誌／アニメの分析を通じて考えるジェンダー」を行いました。雑誌のなかの女性像／男性像を切り抜き、模造紙に貼りつけ、完成した作品を壁に貼り、グループごとに「男」と「女」のそれぞれの「違い」について議論しました。各グループで「発見」をメモして発表しあいました。

また、最終セッションでは、子供向けテレビ番組の「男キャラ」と「女キャラ」の出てくる回数や特徴などを分析し議論しました。討論では、女性が現在少ない職業分野をめざしている女子中学生に対して、同じ分野の女子学生がアドバイスするなど、有意義な意見交換が行われました。現在、日本の高校では、1 年生段階で理系・文系クラスの別など進路が決まっていることも多いので、中学生を対象にこのような事業を実施していくことはとても重要といえるでしょう。今後も、女性研究者支援センターは，次世代向けの活動を継続していく予定です。最後に、今年度、ジュニアキャンパスの進行を務めたポケゼミ生からの感想を紹介します。

＜香月 和敬さん（農学部 1 回生／平成 22 年度　ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」受講生）＞

ジュニアキャンパスでは、ジェンダー研究はつまらない「お勉強」や「差別について考える道徳の授業」などではなく、面白く、楽しいものだと思ってもらえるよう、楽しい雰囲気作りに腐心したつもりだった。受講者のみなさんは、「大学」に来て緊張しているようだったが、作業のときに話をしていると、面白く、楽しいものと感じてもらえているという手応えがあった。

前期、ポケゼミ「ジェンダーと科学」で各分野の先生方のお話を聴いた。その中で、「男女共同参画」の精神への不理解が、真の「男女共同参画」の実現への大きな障害となっているように感じた。そういった現状の中で、「男女共同参画」の精神を多くの人に理解してもらうためには、とりあえずは「男女差別」「男女共同参画」といったお堅い話は抜きにして、私たち一人一人が身の回りの人に、フェイス・トゥ・フェイスでの「広報活動」（？）をしていくことが重要だと考えている。これからも女性研究者支援センターの活動をお手伝いしていきたいし、「広報活動」に努めていきたい。

出前講義「自分自身を科学の目で捉える試み －病気のしくみから私を探る－」

9月18日（土）奈良県西大和学園にて
薬学研究科・准教授　瀬木（西田）恵里

私立西大和学園はスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、その一環として研究者や開発者による出前講義を主に高校1年生を対照に行っている。毎年女性研究者支援センターに女性研究者の紹介を依頼している。薬学部からの講義は初めてとのことで、近年の薬学部の体制（薬剤師養成を主眼とする6年制と創薬研究者教育を主眼とする4年制の紹介）も含めて、講義を行って欲しいとのことだった。高校生に向かって講義をするのは初めてであり、どのような講義が求められているか分からなかったため、事前に担当の先生と打ち合わせを行い、生徒たちにも身体や薬について身近に感じてもらえるような講義をすることを目標とした。

第一部では、身近な病気や薬について興味を持って貰うため、インフルエンザや風邪を題材し、細菌とウイルスの違い、抗生物質と抗インフルエンザ薬の違いなどをクイズ形式で問いかけ、身体がそれらに対してどのような反応をするかについて考えて貰った。第二部では、創薬について知って貰うために、代表的な薬物（解熱鎮痛剤・抗生物質・免疫抑制剤）の開発について紹介し、現在の薬学部の体制と照らし合わせながら、薬の専門家である薬剤師養成と創薬の専門家である研究者教育についても伝えた。第三部では、私自身の研究を説明することで、病態の解明から創薬の標的を見つけ出す試みの一端を紹介した。現在私は「うつ病メカニズムの解明」というテーマで研究を進めている。本病態は近年の社会問題ともなっているが、その発症メカニズムや治療メカニズムは未だ不明な点が多い。そのような疾患に対してどのようなアプローチをとろうとしているか、研究の成果としてはまだ出ていない状況ではあるが、研究の道は完成系でなく常に途上にあるので、現在進行形という形で紹介を行った。

講義終了後、印象に残った部分を尋ねたところ「うつ病の研究をしていることがおもしろい」と答えた生徒もいて、まとまった話ではなくとも、自分自身が行っていることに興味を持ってくれたことは非常に嬉しかった。また、薬学部卒業の進路状況をきく生徒もおり、大学進路のみならず大学卒業後の進路についても色々な情報を知らせてあげることも大事と痛感した。講義後も多くの生徒が個別に質問してくれ、私自身もこのような経験が出来たことを非常に嬉しく感じている。

保育園入園待機乳児保育室

9月に開室した保育園入園待機中の乳児のための保育室では、8人の乳児が生活を始めました。保育士さんに抱っこをしてもらったり、みんなで輪になって寝ころんで、遊んだりしています。どの子もまわりのお友だちが気になるようで、保育士さんとお友だちの顔を交互に見ています。お昼ごはんの時間は、特にご機嫌です。ミルクの時間になると、この小さい体のどこに、こんなパワーがあるのかと不思議に思うくらい、大きな声をあげて、ミルクを要求します。また、離乳食の始まった子どもたちは、少しお兄さん、お姉さんらしく、ゆったりと「おいしいね」と口を動かしています。

隣の部屋にいる支援員は、子どもたちが、「今日は『抱っこ』で来てくれるかな」と保育士さんと一緒に、支援室に顔を見せてくれるのを楽しみにしています。

＜保育園入園待機乳児保育室＞
開室時間　9時から18時（月～金曜日、延長保育有）
利用資格　京都大学に所属する女子学生・女性研究者
対象乳児　生後9週目～年度末で15カ月未満の乳児

連載：研究者になる！－第 27 回－

子育てと仕事で目の回るような毎日をすごす―研究者の独り言

医学研究科・教授・木下彩栄

振り返ると、私が小さかった頃は、「花嫁修業」という言葉がまだ生きていた。そんな中で、父が「これからは女性も教育が大切だからしっかり勉強をしなさい。望むだけの教育を受けさせてやるから。」と妙に真剣な顔で話していた事は今でもリアルに覚えている。今は亡き父であるが、教育という最高の贈り物をしてもらったことは感謝してもしきれない。こうして、私は本学医学部に進学する事になった。時代がまだ昭和だった頃である。入学時には、せっかく医学を学ぶのだから何か社会貢献が出来ればよいと、その程度の意識しかなかったと思う。研究生活を送るという選択肢は全く考えていなかった。卒業後は、医師として神経内科で数多くの患者さんと接し、その後、4 年間の大学院での研究を経て夫婦での海外留学、日本での復職など、気がついたら、臨床医の道よりも研究を続ける方向を選び続けてここまできていた。5 年ほど前に、医学研究科人間健康科学専攻に移ってからは、認知症や在宅医療に関する研究と教育、臨床に携わっている。

キャリアの上で、女性であるが故に悔しい思いをしたことは何度かあるが、いずれも臨床の場においてであった。実は、研究生活においては、あまり女性であることを意識した事がない（そのために日常生活ではすっかりオヤジ化している）。研究という場だけを考えるのであれば、研究職は評価が比較的フェアで、女性にとってはまあまあ働きやすいのではないだろうか。むしろ、女性にとって難しいのは研究という場の問題ではなく、もっと一般的な問題、つまりプライベートライフとの両立という問題があるからではないかと思う。配偶者に恵まれれば、研究と結婚生活との両立はそれほど難しいものではないが、子供がいるとなると話は別である。昼間は保育園、学校や学童があるとしても、子供が家にいるときの「保育」の存在は一日たりとも欠けてはならないものである。「夜は帰れないから、適当にやっておいて。」ではすまないのである。一度たりとも穴を開けられない毎日を何年も送ることは大変なプレッシャーであり、ときどき、脳内の伝達物質が枯渇してしまうような気がすることもある。研究職に限らないが、フルタイムで仕事を続けながら小学生二人の子を抱える家庭生活とはこうした日々の連続である。

配偶者に関しては、男女平等の教育を受けた世代である故に、女性も働くということに対する「理解」というのは、もう当然と言うべきではないかと思う。現実にはまだまだ、であるにしても。それよりも、配偶者が「家事や育児に関わる事を当たり前とする感覚」を身に着けていないと、女性にとっては厳しいものになる。とはいえ、協力的な配偶者であっても、お互い別々のキャリアを追求するとなると、転勤などの問題は避けられない。私の場合も、夫は名古屋に単身赴任をして 2 年目である（ため息）。将来、日本は少子化高齢化が進み、労働力が不足するのは必至である（私たちの年金だって、ないかもしれないし！）、が故に「女性も男性も働きやすい社会」で協力し合って生きていくことが当たり前でなければならない。次世代で本当にジェンダーが問題にならなくなるようにするのは、教育しかないと思う。子供が男児でも女児でも、能力が活かせるような社会であってほしいと切に思う。これは、ひとえに私たちの世代の親としての責任である。

最後に。自分が言えるような立場ではないことは自覚しているが、キャリアを伸ばす上では「人間性」が大切だという事は強調しておきたい。周囲に配慮を忘れず、地道に努力している姿が評価されれば、たとえ子育て中に周りの方に迷惑をかけることがあっても、許容してもらえることは間違いない。ネイチャー級の仕事が何本かあれば、人間性云々と言わなくてもポストが転がり込んでくるのであろうが、私のような凡人研究者の経験からは、人間性と研究に対する熱意、そして英語力、この 3 つの条件が研究者を目指すにあたっては必要だと思っている。若手女性研究者の方には、たとえ漠然とでも自分の目標とそれに向かっての最善の方法やバックアップの方法を常に意識し、確固たる信念を持って研究を継続してほしい。各人が職業上でもプライベートでも最大限の能力を発揮して自己実現が出来る社会、そういう社会を皆で目指して生きたいと切に思う、私たちのためにも、未来の世代のためにも。

Center for Women Researchers

〒 606-8303　京都市左京区吉田橘町
電話　075（753）2437
FAX　075（753）2436
E-mail　w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP　http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/